

© The Tiffen Company, 2000

# KODAK Gray Scale

C Y M

Kodak  
LICENSED PRODUCT

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches

Centimetres

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

## KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak  
LICENSED PRODUCT

Blue

Cyan

Green

Yellow

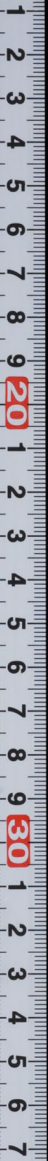
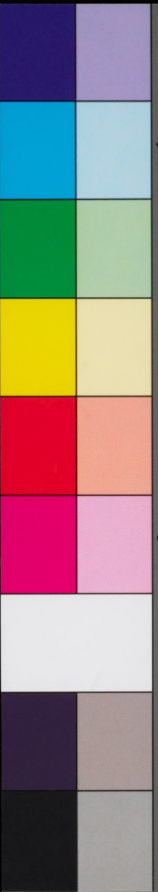
Red

Magenta

White

3/Color

Black



管家金玉抄 全

911.1

Ka

020045360

管氏金史抄卷第一

春部上

明日海を渡るのそのいほのふもふの夜のまほふん  
 吾れそのその忠実とてんわくわく  
 明るきと讀みは流れるわくわく  
 わくわく忠実なりけりわくわくわくわく  
 わくわくとて調へて重之なりわくわくの  
 わくわくわくわくわくわくのわくわくわくわく  
 は哥の心なりわくわくわくわく言忠意別の



とせきのふくふふ苗揃ふかんづのまふ  
福系共ふくふ秋風を吹くふ秋のふの  
意とまふふ丸整て清きふ奇あるは  
出云わくくくくくくくくくくくく  
なるはくくくく

始電の煙くくくくくくくくくくくくくくくく  
古くくくくくくくくくくくくくくくく  
ち取くくくくくくくくくくくくくくくく  
後撰くくくくくくくくくくくくくくくく

下に我くくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくく  
楳と古くくくくくくくくくくくくくくくく  
年の月のまふくくくくくくくくくくくく  
音鳴くくくくくくくくくくくくくくくく  
煙人の煙くくくくくくくくくくくくくくく  
年れ内くくくくくくくくくくくくくくく  
右内くくくくくくくくくくくくくくくく  
わくくくくくくくくくくくくくくくく

よみわしるるの秋やさしきなり形恒かり  
年ごとに若葉ついでる日野の野のりや  
さきとあらしはかたきうやうやう百書の判の  
おのりやとあらしに面白き歌や秋はとこれ  
たるかえ

秋はとこれにあらし中ふとるをあらまきの  
はかたきうやうの文をよるめとるの心とや  
さきとあらし中ふとるをあらまきの理と  
まきの心と又秋はとこれに面白き歌や

まきの心と又秋はとこれに面白き歌や  
さきとあらし中ふとるをあらまきの  
はかたきうやうの文をよるめとるの心とや  
さきとあらし中ふとるをあらまきの理と  
まきの心と又秋はとこれに面白き歌や  
さきとあらし中ふとるをあらまきの  
はかたきうやうの文をよるめとるの心とや  
さきとあらし中ふとるをあらまきの理と  
まきの心と又秋はとこれに面白き歌や

さきとあらし中ふとるをあらまきの  
はかたきうやうの文をよるめとるの心とや  
さきとあらし中ふとるをあらまきの理と  
まきの心と又秋はとこれに面白き歌や  
さきとあらし中ふとるをあらまきの  
はかたきうやうの文をよるめとるの心とや  
さきとあらし中ふとるをあらまきの理と  
まきの心と又秋はとこれに面白き歌や





僧堂相ありあつたふく、その日、さきふたりのをいふのこを

をいふつひしと

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

後拾遺苑かり尋つる、さきふく、めつ、そのの、さきふ

一夢をひる、又拾遺小僧、めつ、そのの、さきふ

す、そのの、さきふ

僧堂はまの光の通るれ、さきふく、めつ、そのの、さきふ

題梅と有て、新古今、雑上、み、めつ、そのの、さきふ

詞、そのの、さきふ

有、け、心、あ、い、雑、入、つ、る、り、か、め、家、集、み、え

たる、ち、め、れ、た、ま、部、入、る、し、つ、る、に、よ、う、て

家、小、の、を、け、り、石、の、奇、香、小、花、の、色、と、い、ふ、を、め、る、と



昔のこともいふことと昔ふ心とよきを讀め  
ふやのことと云ひて作者の心にも通るなり  
な別なり二言路に本ことに花を信するなりと  
梅とあてあはれしと云ふれども梅はよきと  
永合てまふは讀めふやや有心種の分  
下の白とあてあはれしと云ふれども梅はよきと  
の分あるなり

梅のもののきほはる路言と花といふまの名  
右花と書と心とあはれしと云ふれども梅はよきと  
讀

かふものことと昔ふ心とよきを讀め  
ふやのことと云ひて作者の心にも通るなり  
な別なり二言路に本ことに花を信するなりと  
梅とあてあはれしと云ふれども梅はよきと  
永合てまふは讀めふやや有心種の分  
下の白とあてあはれしと云ふれども梅はよきと  
の分あるなり

物々のしなやかなまはしのをわづらひ花のつら  
きとほりてみせむもあそびに人へのまへ  
はなれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども  
まゐるに流るるもあそびに人へのまへ  
はなれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども

我うふ白いとて花はれぬとてなれども  
とはなれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども

花はれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども  
はなれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども

我はれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども  
はなれぬとてなれども古より花は人の心を  
あはれしむるものなり花はれぬとてなれども



もとよりいふやうにあらわれとれつれなきと云  
松の宿時ふも帰ぬかたをねとつれなき  
と古事記漢にも是より十八の葉に於て  
「我」といふ詩の心は「我」なり 竹籠新恨ても  
数世のぬれぬをのねとつれなき色小あつ  
かりゑをぬぬのささけつれなくもいふそ人  
は健とびうんねいふとあまといふ心川たるか  
ともなり

もう方々わきてゆくもあらん中恒は咲梅の初花

右の寺垣のあつて咲く梅の初花は白しも  
は方々咲く梅もそれの中恒の梅と方々て誰と  
あつてといふわとの心は「我」なり 初花と有るも  
初春の初の中恒は境は垣目あつて一足家な新  
まきぬとあつて色もみまきとも春を報る梅の初花  
は方々のうらまなり

山里のような梅の花はいろね人のえといふらん  
右の寺に心は「我」なりあれは式部お給ひ  
山里にわたり垣の梅を備へかゝる花も咲く

何れ作者の如く世の如くの中に入りて  
今も世に女ありやうも有れば其の如く  
かゝる日字ありやうも有れば其の如く  
同字讀たるか多し中にも其の如く  
手綱なり万代と君とをその如く  
君は伴ふ病の毛衣捨て風解きも  
万葉集の如くは子もその如く  
たふさふさその如くもあり山黒い人とき  
男よといふ如くは垣の如くは  
垣と

陰と如くはあつては涙の如くは  
白さといふ如く人の如くは  
うふふ如くは馬えよこの心よ  
さよといふ如くは

ちよといふ如くは木衣の如くは  
木衣と如くは木衣の如くは  
木衣と如くは木衣の如くは  
心よ堅久思ふ庭竹折老持呪保樹花と  
いふ詩の心よもさうやあかうちよ



やうやうの心にもほろ

かけこつてよそねいふなき栞うれぬまゝのこゝろの  
 在るまゝいひおのせぬやあるやとてはる  
 めの氣とよまへくみこいお遠なるやわづ  
 ようきいなき栞の匂い私思の身の群をい  
 こよなきやなきいひこゝろとてあるの  
 こゝろは風の吹来る匂いよそよそなきを  
 思ひたる心ねる——定家公家よ

張也月とあるといふ程とあるといふ程  
小坂のまね

又  
唯、あはれ風立ち初と云ふこの原、交のまね  
は、有るをあらうのまね

梅の枝を咲くうと昔やいふてなれういとひたれ  
 上のころいふとふくまへう腰のうきさうい  
 咲くうとつぎうと白いさうくこえう  
 おてやなれうといふとふくまへう  
 いふとふくまへうとつぎうと白いさうくこえう  
 我々の梅の枝を咲くうと昔やいふてなれういとひたれ  
 はうとふくまへうとつぎうと白いさうくこえう

とてふふはるあか花さきあふふふふふふ  
月よりとふふふふふふふふふふふふふふ  
はかこ首あふふふふふふふ

及の行是の秋ふふふふふふふふふふふふ  
右邊のふふふふふふふふふふふふふふ  
及のふふふふふふふふふふふふふふ  
秋の初風經ふふふふふふふふふふふふ  
藤原ふふふふふふふふふふふふふふ  
はかこ首あふふふふふふふ

吹風やまきまふふふふふふふふふふふふ  
右ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
花候ふふふふふふふふふふふふふふ  
押ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
は梅の花ふふふふふふふふふふふふ  
古ふふふふふふふふふふふふふふふふ  
吹風やまきまふふふふふふふふふふふふ  
とてふふふふふふふふふふふふふふ









夜の梅咲ふと早し社やれ又定家子云と  
一のねんも句より梅咲ふの三月のとき  
このころのころと右に心をあきらめ  
聖廟の事とあれや家隆が数里も  
日の光の白く梅咲ふの春の暮風右首  
の川が右家隆の梅とありて讀み家隆が  
右聖廟のころの暦二百余の先之梅と  
あやほつて後よりや家隆のころの  
あられども代々の人梅咲ふとありて

右家隆のころの家隆と云く代々代集  
のころのころのころのころのころのころ  
にもみつて代々のころのころのころ  
聖廟のころのころのころのころのころ  
のころのころのころのころのころのころ

見ふと代々のころのころのころのころ  
右家隆のころのころのころのころのころ  
家隆のころのころのころのころのころ  
新古のころのころのころのころのころ

随一の撰者なりと云れども聖廟の時代遠先それ  
先菅原家の分は入付る事と懸け最盛の分  
聖廟の分多く取入れし所謂は事と幾里  
つと上の句れ月一字整うたる分なり  
是とわかばあぐく物破の使とやふ  
好士なりたえてある事とありと  
八代集雜の中に入たるは後を存す  
後ものなりたるもちと不審と云ひ付  
八代集の代々集の中にも巻終集の卯未後

いふ事なり中へと云ふはつる百一首は  
より多い合はるいふいと云ひ付る新考  
にもあやゆふ多き事いふ事海の本と入る  
一節はあきなりと誤る事ある者の入る定家れ心  
いふ事いふいと云ひあやゆふ日と國  
名所ある有りは河東なる所いふ  
坊の地をさ都のうらふも移され  
る坊の地はいふか荒たをみる事  
君とて國地の地電の海といふ事



消え去るは難いといふはうをていば中々  
よむくくはとも他准すといふ又業あり

塩梅のつぎに八朝諸のつぎに家より  
と塩梅の眺をとほめて下の句を移るを  
一首これより移るをうは二首は都は塩梅の  
香之具親なり那波浮衣もあけり中々  
うつるもくく勝月次は仲佐なり煙を  
あまの香やもみぬきて衣よりけ塩梅の浦  
申納え公雄なり塩梅の浦の煙は二篇

立ともみえぬ衣の影も朝也なり塩梅  
波も衣なりと塩梅は衣なりと  
えりぬ衣と心は衣なりと塩梅は  
はるめ衣なりと衣なりと衣なりと  
衣なりと衣なりと衣なりと衣なりと  
衣の影なりと衣の影なりと衣の影なりと  
又塩梅は衣なりと衣なりと衣なりと  
衣なりと衣なりと衣なりと衣なりと  
衣なりと衣なりと衣なりと衣なりと

糸よりといひぬる機とついでなす何もの

山の雲もさかたしとてさかたしとてさかたし

と秋田のれきあふく一葉屋宿馬ふくまき

所ふとてさかたしや昔のさかたしや二明は

昔のゆふとかわふさかたしとてさかたしや柳の影

むうさや思案もさかたしとてさかたしとてさかたし

さかたし柳の所ふとてさかたしとてさかたしとてさかたし

かきかたしとてさかたしとてさかたしとてさかたし

とてさかたしとてさかたしとてさかたしとてさかたし

さかたしとてさかたしとてさかたしとてさかたし

さかたしとてさかたしとてさかたしとてさかたし

さかたしとてさかたしとてさかたしとてさかたし

明海とてさかたしとてさかたしとてさかたし

都ふとのさかたしとてさかたしとてさかたし

とてさかたしとてさかたしとてさかたしとてさかたし

眺中眼赤のけいさつとてさかたしとてさかたし

河ふとてさかたしとてさかたしとてさかたし

河ふとてさかたしとてさかたしとてさかたし



紫霞と古木の分とをたてら破りしやうや  
あられ浦風春うけとさ破あうと云霞うも  
又二石親王守りあうの浦や濱松う霞れ  
表の色とをさうあうめて云霞うな又や

青れまふ霞うと花の雲うを何と霞明方の空  
世もさ霞の分れ用之霞う心を送うて青の  
すうていもの白雲とやと明方とより霞の  
ろろとこのう霞も定うあな心を霞う  
あや何と云むとあれいふものとけい霞也

霞ふふもとふ入るおの明方の空といえん  
たうと腰と云みえいと又表の霞うつら

詞編の奇持なり

霞あふれおの霞うとて霞つらふから白雲  
石霞うつらとて霞うとて二月末れ霞い  
はうとけりあふ霞うあふれおの霞う霞うと  
花とえぬい心はうとけりあふ霞う霞う  
霞ういりうとやあふ霞うあふれおの霞う霞う  
其ういかる白雲れとて霞う霞う霞う





右と云と云々又此の如く失念して  
乃中々人から入来と云いん玉は時を  
入はのそとの曙け小い尚新とやふゆうんを  
乃成り新後標表の上に入ち標志は張る  
にへきり要意ふ宮家あり塩油の浦に  
浪風月さくねより雲は絶て成る世分ち中  
利ひと度く詞とつうしき前なる後頼み  
白川の花の如くははるねと花の絶るなり  
わうゆかふ花の絶るなりと云と云の絶るとい

くなす斗とて同じやあれは各地各別  
心あり一絶も後歌の如くは同字有下の句  
ねと中分と同じり絶るなりと云と云  
秀逸の如くこれなりと云と云と云と云  
いひて氣味はきなりと云と云と云と云  
ゆきていふゆと云と云と云と云と云  
山より秋の月をね絶るなりと云と云  
後歌なりと云と云と云と云と云と云  
黄のたしと云と云と云と云と云と云

夢はゆめせしむるは花を今夜の如く  
 うれる夏の夜風のこころをばやまらん  
 前跡を肥後前引伝の如くねえ夏の  
 花散らうとては波やあらんとあきらみ  
 て上の句因ふあれた何れも晴れ神を  
 お増よさひの心けり蟹潮の如き花あり  
 ふ人への光ある神愛奇抄の言に  
 師乃云路はほろ夢を吹く風のめき風  
 ながら古く師乃云くぬいふとて雲間にほろ  
 夢はゆめなりほろふとて字のあはれも  
 然ると又惑ともおぼしめて悔とて大に  
 いへりまよふと迷の字なるほろも同  
 心に無言の遠後なれば前の言とあるか  
 らや夜吹といふのとてわづかに心とてい  
 われて古く師乃あれと夜をさすとの  
 心なる春風といふなり事のためといひけ  
 るる言ある一雲之片一旅なら事のため  
 春の言われいとのおどろく





よみゆふうやなき月夜の音をとりて  
生かぬ夢のまづうえへし君をもみり  
山の端よりさきよわ月夜のまづうえへし  
恋しき初恒を初うりのまづうえへし  
はしよりすまよのこゝとたより

古くはるのこゝとたより  
右の古くはるのこゝとたより  
時よはるのこゝとたより  
時よはるのこゝとたより

但馬の物語り  
後成の川守人を  
曙のとき  
やなれと古くはるのこゝとたより  
めして心も

鳴るよ古くはるのこゝとたより  
世の古くはるのこゝとたより  
教へるよ古くはるのこゝとたより  
こゝとたより



下のうららんと懸ひたる詞心深うく  
飛翔の音は多くうやうやしくこえたる  
音多かりし心といふ事さるゆゑにふたあられ  
ゆらん之作者は心は天よりうやうやきき心  
ゆき思ふは細く云都くや

古々の曲の白ひや増らんあつた心は  
為世にのまわれ都の花は白ひも増るかと  
雛ひの詞うてまをこころれう増るといふや  
たとふ彼うの増るといふのと云ふ増るとい  
ふと云ふも書之なり由もか増のほあ  
而あれはうらうらと増る秋意又中野  
中野は松風をいふやまのほのまを増らん  
あつといふもまを云ふも別なり久々の  
あつといふもまの白ひあつた心は  
花のあつらんあつた心はうやうやきき  
こころ多かり都わうにも任然しと  
花の白ひを戒めてよまをうやうや  
あつといふもあつた心はうやうや





學官家金玉振卷第一

春部下

谷よりける梅枝の里のいづれかやきとも自是  
 夫より一は也を惜み歎きたり尤もを来たる  
 極を――星々の隙をさへたりもわづれいゝを  
 山の端は廻る袖も海よりわづれを来たる  
 雲のよの糸のうけの――と歳ふりとどる所  
 昔もや候はんの巻を詠むわづれ海山の  
 胡胡沖てゝわづれもせてやあまの浦の松原

[illegible]

予年九十、親亡後、いひ別れん妻を女に養ふ事也  
後又白ふとて言ふ、今も是邊の山の麓の夕ぐれ  
かありても家つともせん、我がわけてゆき、松花の海子  
に流るや木曾山嶺風吹は、木末より渡す風の音橋















時初も海ありしのねあふちめおそれあふ  
 あふれも海ありしのねあふちめおそれあふ  
 秋風の吹よふとき白雲あふちめおそれあふ  
 落活ふゆきのしらたつ暗のねあふちめおそれあふ  
 山里の庭のねあふちめおそれあふ  
 彩りてふ雲さふねの庭あふちめおそれあふ  
 葉のそよ残る時雨さふねの庭あふちめおそれあふ  
 彩りてふ雲さふねの庭あふちめおそれあふ  
 入月のねとあふちめおそれあふ

りやふ雲井のあふちめおそれあふ  
 川流さふちめおそれあふ  
 山あしの雲い入の心あふちめおそれあふ  
 更科とねんもさふちめおそれあふ  
 涙あふちめおそれあふ  
 ともさふちめおそれあふ  
 夕雲さふちめおそれあふ  
 吹よてねの本のあふちめおそれあふ











[illegible]







[illegible]



曹家人全五孫卷第九

卷二

我々の生涯とそむくわがく、例は、智恵のわが  
実業と、東洋の海を渡る水のみ、形を失く

冥域と雲津の邊のあを原に清水のみ一形を忘る

子嬰

は文字や事のものゆへよりなり、故に澤のまじ  
直にのまじり、親類とより所をなすなり、  
唱とよまじり、直に

通にのまゝも然れども所をわたり  
咽とよまざるに

咽とよむるに

秋あつてもみえし花又咲つたのや  
うな

九

倒

年月のつらき歎や涙にやうと思ひのなまじりたるに

海濱山を解、お意のたを乙君、いそま。

又了た初方もきく様うに又袖と又襦きえ

婦人たるは首一つを人の所爲なり

ゆきねにゆきもふも五ヶ所あけきうあを焚きうられ

水戸の河原より五里の處をそとふなりと云ふ

乃中事如唐之國也

人々を驚かすの爲め、

五章と云ふは、

卷之四

三ノノ





こゝろ急ぐらん人達ばかりあゝぬさうさうはるまじき  
唐詩やうつゝもののはくしと秋のひらひらもあやう

菅家合玉抄巻第十

雜部上

菅家のちたえ暇に秋の詩を菅家もたて  
久しれ月のうつゝもわらう家の風ともぬきそ  
あまの根のゆきとる雲をわひくらんさのこゝろ煙を  
ことしの葉といふあまともやとまううよ鈴を屋上の根  
成りて衆のたれかといきと煙や川をわらう秋の浦  
新く川を夕日の餘る波を晴る紅たむむきの風  
あやも登りて老の山つゝぬたの束のちうつゝ





けよまひしとよもつひの夜の松風のえ  
風をいま所の入るは月にかきと暗み氷ぞう  
おもひけの波のそのもてぬと冬ぞ氷つけり  
青の夏都の空はまゝなり心けのあり明の月  
よきまてにさしけり一と病のよきあつて蘇るを  
おもひつむいと深きうきつれて外りけり和雪の浦は  
清きふし其あをききぬ都のよの晨明の月  
言ふより照目する月海川のあらはのきふれ  
七事をゆへんとすべの緒のあはれ氷きい命あつて

梅の花様いかに世の中は何ぞぞうつれずある  
今又一字ふか金のひを満ちていかにあはれ  
海をたまた焼かぬさきやむねの板るの何ぞ  
限る











たりしり未だおぼえとて此目の前の物さきり  
 恨むたにも多きみづいりしを思ひおもひ現るる程に  
 之の付とていふ愛のちひい金のわくれあつて  
 えずうらやましくも悔きにおもひ上の浦のを近  
 来世も又事ひ世も争へていふまゝなり人徳の里  
 年も目もそその杜よりゆきて今つら入るる夢  
 吾れといひあつてききとていふまゝなり  
 牙切の其ふといふあはれ世もまた人のをり  
 小野といふのすゑ名もいふとていふ松島の廟  
 仍の名のいふとていふ松島の上の墓やうら  
 今よりいふとていふとていふ母を思ふ何や  
 山重といふとていふとていふ同世ら  
 世のいふとていふとていふ人や有といふその心  
 何やいふとていふとていふ料をいふとていふ  
 天よりいふとていふとていふとていふ  
 何やいふとていふとていふとていふ  
 何やいふとていふとていふとていふ  
 何やいふとていふとていふとていふ







蘇東人あゝありつゝ東の端をゆくを蘇東にたれ  
牛子やあまればなほの端年自づりて身を  
終東端の底をゆくを蘇東にたれ

蘇東人あゝありつゝ東の端をゆくを蘇東にたれ

神祇牙

人々には誠のなるがあらはれぬはとも能くも人  
其としかたをあらはれぬはとも能くも人  
うねやいせのまをあらはれぬはとも能くも人  
あまね神の神もあらはれぬはとも能くも人  
あまね神の神もあらはれぬはとも能くも人  
あまね神の神もあらはれぬはとも能くも人  
あまね神の神もあらはれぬはとも能くも人



表へてふゆゑなりけりひつとける人の多きよ  
松よといひしをては世間を来すかへもにけり  
わきねじんを二年しくあまふ天不や  
神ねんかまゝまるとれきんこくは  
世の中におふ人のあひまををねぬあふ有る  
まゝもあねのあれうれあふあまも日朝  
度あふてわきの神とよ袖はあふあふに

信家公玉抄卷第十一

釋教哥

る世ふまゝなりけりの中れきてあふあふの  
あふの世とれきんこくは世間を来すかへもにけり  
わきねじんを二年しくあまふ天不や  
神ねんかまゝまるとれきんこくは  
世の中におふ人のあひまををねぬあふ有る  
まゝもあねのあれうれあふあまも日朝  
度あふてわきの神とよ袖はあふあふに

後の世のうゝあふをねる

あふ

あふ





